

【書評・紹介】

千葉 伸彦 編『阿寒のうた（ウポポ）』
 (札幌, クルーズ, 2012年4月, B5判, 172頁+CD2枚, 2500円+税)

甲 地 利 恵

1. 本書の概要

本書はこれまでにないアイヌ音楽の専門書である。

現在の阿寒湖畔に伝わるアイヌの伝統的な歌を収録した2枚のCDを主体に、本書にはCD収録曲に関する情報として、カナとローマ字で表記されたアイヌ語の歌詞、民俗的情報を含む歌の解説、アイヌ音楽の要ともなる声の技巧「レクテ」の解説、音源から精密に採譜された楽譜、演奏の場の雰囲気をつ捉えた豊富な写真が掲載されている。第1版は財団法人アイヌ文化振興研究推進機構の助成により2012年2月に刊行された後、第2版として(株)クルーズより出版され、一般の購読が可能になっている。

千葉伸彦氏の編集のもと、「曲名」「曲の紹介」「歌い方について」は千葉氏、「歌詞」「歌詞について」「解説」は大野徹人氏が執筆し、写真撮影は宇井眞紀子氏が行っている。楽譜作成は千葉氏による採譜を主として複数スタッフが作業を行い、甲田潤氏の五線譜監修のもと最終的な校訂を千葉氏が行っている(本書P168)。

採録から刊行に至るプロジェクトを統括した編者の千葉氏は、これまでも千葉(1996)をはじめアイヌ音楽研究史におけるエポックメイキングな論考を発表している研究者である。同時に優れた演奏家であり、自ら伝統的なアイヌ音楽の演奏を行い、アイヌ音楽の伝承と展開を志す若い世代に向けたさまざまな活動にも取り組んでいる。本書はそうした研究・演奏・教育活動の結晶でもある。

本書の制作目的は「序」で次のように述べられている；

「現代のアイヌの歌「ウポポ」の名人であるフチたちの歌声を世に伝え残すこと、アイヌ伝統曲の独特な歌い方を知りたい人・学びたい人のための参考になること、アイヌの歌をあまり聞いたことがない人のためにはアイヌの歌の世界を紹介する本となること」
 (本書P10)

この趣旨の実現に不可欠な2枚の付録CDはオリジナルの採録音源によるもので、クリアで質の高い録音・編集がなされており、アイヌ音楽の鑑賞のためにはもちろん、歌を直接フチたちから習っているかのような微細なニュアンスを学べる良質な教材としても利用できる。

フチ達による美しく力強い数々の演奏については言葉を尽くすよりもCDで直接味わっていただくとし、ここでは本書の持つ音楽学ないし民族音楽学研究書としての側面に評を絞ろう。

本書は単なる曲目解説書ではない。アイヌ音楽の学習や演奏のための手引きとして読まれるべく平易な文体で綴られているが、その親しみやすさにつられて読み進めていくと驚くべき情報量と緻密さに読者は圧倒される。各曲についての阿寒における伝承の細かな内容まで随所に記載されていることで、本書は阿寒におけるアイヌ音楽伝承の最新報告書ともなっている。

表紙写真：宇井眞紀子氏

2. 本書の構成 (目次より転記したが各曲目のインデックスは紙幅の都合で割愛。なお〔 〕内は評者の甲地による注記)

序

アイヌの歌の歌い方の特徴と楽譜について

アイヌの歌謡におけるアイヌ語

はじめに (アイヌ民族の紹介—その文化と歴史)

この CD で歌っている人たち

日川キク子、広野トヨ、佐々木宮子 Disc1 [CD収録の20曲と[参考][番外]6項目の解説と楽譜]

日川キク子、広野トヨ、佐々木宮子 Disc2 [CD収録の7曲と [参考][番外]2項目の解説と楽譜]

弟子シギ子、床みどり Disc2 [CD収録の16曲と [番外]1項目の解説と楽譜]

付録 楽譜 床みどり [CDに収録されていない13曲の解説と楽譜]

〈付記〉 音声ファイル・リスト

〈付記〉 写真撮影データ

〈付記〉 執筆者／楽譜作成／CD制作

あとがき

Summary [タイトルは「The Songs of Akan」]

3. 本書の「歌い方について」について

CD収録の各曲の演唱について解説した項目「歌い方について」での記述の細かさは圧巻である。演奏に関する一つ一つの懇切な注記は、現在の伝承活動や研究にとってはもちろん、50年後・100年後の読者にとっても重要な21世紀初頭のアイヌ音楽情報として遺るだろう。ちょうど約半世紀前の、本書と同じように音源を付録し豊富な譜例を掲載した体裁の日本放送協会(1965)が、今日ではさまざまな問題点を指摘されながらもなお参照に立ち戻らねばならない重要な著作となっているように。また、同前(1965)を今日の視点で読むとき、1曲1曲について当時の演奏が具体的にどのように行われているのかももっと細かく記述してくれていたなら、と隔靴搔痒を感じることもあるが、本書はその願望実現の具体例を示しているかのようだ。アイヌ音楽研究史において同前(1965)後ようやく痒いところに手が近づいたように感じられるのは評者のみではあるまい。

一例を挙げると、「歌い方について」では、伝統的とされる響きを作り出す根幹となっている発声技巧「レット」について、一人ひとりの歌い手それぞれの個性や癖を聴き取り、それらを採譜したものを提示しながら、曲ごとにそれぞれの表出のしかたを簡潔に解説する；

「日川キク子さん(Kの段)の節のリズムはとても微妙なニュアンスがあり〔中略〕16分音符とも3連符ともつかない独特のうねるようなグルーブ感のあるリズムで歌っていますので、譜は大まかな目安と考えてください。広野トヨさん(Tの段)はストレートな旋律の要所に短い裏声のレットを入れる歌い方、佐々木宮子さん(Mの段)は声を分断するレットを使っています」(本書P36)

もちろん、このような記述はCDをよく聴く、あるいは聴いて覚えることを暗に前提としている。CDがあるのだから「16分音符とも3連符ともつかない」とわざわざ書く必要があるのか?と考える人もあろう。しかし、すべての人がこうした微細な変化を意識に上せて聴き取れるわけではない。「技巧的な何か」は無意識裡に感じられても、それが何であるか認識するには至らず、説明されて初めて意識し理解することはよくある。また一般論として、演奏の上達

には客観的な視点からの解説と指導を得ることが欠かせない。その音楽に精通した者の解説と経験を積んだ指導者からの指摘がアイヌ音楽の習得にも必要である以上、本書の「歌い方について」は両者の役割を補助するものといえる。

4. 本書における楽譜の研究的意義について

「歌い方について」のように言葉に置き換えた音楽分析情報には抵抗がなくても、本書の白眉である（と評者は信ずる）楽譜に抵抗を感じる読者も少なからぬことは想像に難くない。この抵抗感は、楽譜とはそこに書かれていることを読み取ってそのとおりに演奏するもの（＝「規範的楽譜」）とだけ一般には理解されていることや、そこにあるだけで読譜を強要するような威圧感（音楽の授業が嫌いになった原因として楽譜を挙げる人は一定年齢以上には多い）から生じると思われる。

そのためか、本書についても「楽譜掲載は必要ない」「アイヌ音楽の楽譜化は研究的意義がない」などの意見があったらしいことは評者の耳にも届いている。後者は全く見当違いな素人意見と言わざるをえないが、なぜそれが見当違いなのかを述べなければ本書の真価が本誌の読者に伝わらないと思うので、以下に評者の考えるところを本書の内容に即して言及しておこう。

本書の楽譜には大きく二つの学問的意義が見いだせる。一つは、最終的に作られた楽譜それ自体が千葉氏のアイヌ音楽研究の集積であること、もう一つはそれが実践の場に応用する可能性を一つの具体的な提案として示していることである。

採譜という作業は、単に鳴っている音を機械的に音符に置き換えることではない。10人採譜者がいれば、また採譜目的が10種類あれば、10通りの異なる譜面ができる。つまり、いかに客観的記述を心がけようと、結果的にそれぞれの採譜者の記譜力、演奏の解釈、採譜目的の理解度が反映されることになる。鳴り響いている音のつながりをどのようなものとして分析的に聴きとったか、そしてそれをどのように書き表すべく検討したか。採譜された譜面には、採譜者のその音楽に対する造詣、理解度、聴き取り能力、分析力が如実に反映される。さらには音楽的分析のプロセスと結論が、一目で分かる形で提示される。

もうおわかりだろうが、どんなに五線譜の読み書きに長けていてもそれだけではアイヌ音楽を適切に視覚化し記述できることにはならない。採譜作業を統括した千葉氏のように、アイヌ音楽を知悉していると同時に、五線譜記譜法とアイヌ音楽との乖離度（つまり五線譜記譜法の限界）を音楽学的に理解している者が採譜して作る譜面は、余人をもって代えがたい音楽分析と思考の過程と結論を示す研究成果そのものなのである。

このことを理解した上でなお楽譜にの形で表している研究内容を批判するならまだしも、専門家に諮りもせず、規範的楽譜として使う人はいないだろうから研究意義はない、と断じられたのだとしたら同じ学問をするものとしてまことに許し難い。同時に、研究意義への理解という点についてかかる孤立的状況の中で、アイヌ音楽を視覚的に記述することの重要性をふまえ全曲の楽譜掲載の方針を貫いて刊行にこぎつけた編者の労作に深く敬意を表したい。

では次に、楽譜の作成と掲載に意義があるとして、アイヌ音楽を「記述」するのは何のためか。

前項で触れた「歌い方について」では記述が文章でなされている。これと両輪を成す、ここで行われている音楽技巧的な何かの記号的・視覚的な記述が、本書の楽譜である。採譜作業を行った人には覚えがあろうが、いかに普段私たちが音楽を聞き流しているか、瞬間的に行われる何か技巧的なことを意識できずにいるか、細かく音を書き取ってみて初めて気が付く事象

は意外に多い。アイヌ音楽の声の技巧「レッテ」が、何か特徴的な発声であることは理解しても、一瞬の間に行われるそれが具体的に何なのか、たとえば本書 P11 で分類されている技巧①②③のうちのどれに当たるのか、いくつかの要素に分析され分類され「記述」されたことで認識の手掛かり（の一つ）が初めてできたのである。もちろん、その分析や記述が学問的に妥当であるかどうかは別途検証されなければならないが。それを文章でなく、CD を聴きながら瞬時に目で追って認識できる形に書かれていることの便利さが、本書の楽譜掲載の利点の一つである。ただし念のために言い添えれば、学習者がおしなべてこれらを読譜できる必要は全くない。

本書の新しさは、これらの楽譜が「記述的楽譜」の性格を基本としながらも、「学習」という場面を想定した「規範的楽譜」的な使い方にも援用が可能となることまでを意識して作成されている（少なくとも評者にはそのように思える）ことにもある。

伝統的にアイヌ音楽の学習は、幼い頃から周囲の優れた年長の歌手の演奏を直接聴き、傍らで一緒に歌い...といった口頭伝承でなされてきたし、おそらくその基本は変わらないだろう。しかし、そのような理想的な幼児からの環境と学習時間を得ることが難しくなった現代では、CD などの視聴覚資料を通して聴き覚える二次的口頭伝承の比率が増えている。なお、本書も二次的口頭伝承性を意識してか、CD の一曲一曲はいっしょに歌いながら練習するのに十分な長さで収録されている。

しかしながら、CD を「聴く」だけの学習なら既に多くの若い世代の人々が試みている。にもかかわらず「フチのように歌いたい」「どうしたらより伝統的な歌い方で歌えるか？」というニーズは、評者が日頃接している限りにおいても年々増えており、かつ解決されていない。伝承の現場での学習に対する要求は、単に曲を聴き覚えるだけの段階を超えた、次の段階に向けて高まってきている。つまり、学習目標が明確で、その達成に向けてできるだけ効率よく短期間で、なおかつ伝統性を損ねることなく習得できるようなアイヌ伝統音楽の学習メソッドへのニーズである。

伝統性をふまえたよい教科書やよい教授法の確立のためには、その分野を含めた基礎的研究の蓄積が必要であることは言うまでもない。アイヌ音楽の歌唱を分析し、音楽要素を視覚的に記述したことで、本書の楽譜は、それ自体口頭伝承の補助手段としても活用できる可能性の他に、新たな学習法の確立に向けての必修事項について、具体的な提示もを行っている。このことが、本書のもう一つの重要な成果である。もちろん、それが古典的な五線譜という手段を踏襲してよいか、他にもっと有効な方法を見込めるのか、については今後検討されなければならない。だとしても、学習にとって大変重要なアイヌ音楽の諸要素の「記述」について、一つの例示・提案がここでなされていることに対し、研究者はもちろん伝承の現場での指導的立場にある者も、真摯に受け止めて考えていかねばならないのではないかと。

5. 展望など

研究書としての本書は以上のように画期的な内容を備えている。あえて今後の展望として注目を加えたとしたら、初心者から上級者までの段階に沿った教科書としての体裁であろう。

例えば、歌い方の説明には日頃音楽のプロフェッションの場にはないと通じない表現もややもすれば見受けられ、工夫の余地があるように思える。もっとも、「学びたい、歌いたい」という明確な目的をもった読者にとっては、さしたる障壁にもなるまい。そのようなニーズを最もよく知るゆえに、編者も本書を作ったのであろうから。

もう一つは、ある意味ぜいたくな注文であるが、初心者の手引きとしては情報量が多いことであろう（编者にしてみればこれでも相当な情報を捨象したに違いないが）。情報量が多いこと自体は悪くはない。情報を減らせということではなく、「アイヌ音楽のメソッド作り」（本書 P169）としての目的に絞っていえば、諸情報を学習体系として整理し段階・系統だてて提示することが今後必要となってくるということである。しかしそれも別途、たとえば音楽教育法とか広義のカリキュラム研究といったような分野まで広く、吟味検証されていくべき話であろう。その前段に本書のように緻密な研究が用意されていてこそ、系統だった教科書ないしメソッドも初めて構築が可能となる。その意味でも本書は「アイヌ音楽のメソッド作りの最初の一步」（本書 P169）として、これまでにないアイヌ音楽の専門書であるといえる。

参考文献

千葉伸彦

1996 「アイヌの歌の旋律構造について」『東洋音楽研究』61:1-21 東洋音楽学会
日本放送協会（編）

1965 『アイヌ伝統音楽』 日本放送出版協会

（こうち・りえ／北海道立アイヌ民族文化研究センター）